



伊勢文

公

ル呂
520
卷 8

東遊祀後編卷之三

四五六谷

南谿子著

四五六谷ハ越中飛彈信濃三國の百入り込る谷あり
る神通川と逢ふり又支流と流るるのり小谷ありて是

奥と鹿者けりて幸飛州舟澤の人あけ谷の奥深

んとて三日の糧と用意して阪川小谷の入り小谷を食

給ふるにぬまは魚成物り食す於救日のる入り

小ふく竹の者の魚と物り居る類とんやるる小是類の化

がり大日鷲のまきまきとて魚成物り居る者も

あふりて如り凡る小海たる者の類も是れ小食して



さいんくかききさのひおくみゆるうへは述べ書こまらる
 先とていつとぎ所ゆきり選所とたふふ教法にに何
 書こまらる書くのできれば世眞の神の信のりへい入
 る事とて思はひくかふる事法ありてとていんくとて思は
 奥深く入る者なりとてしき事法は法令のふ飛驒のま
 の人なす存するといふは山科の雲ゆるみは山と谷の
 日受のうまて人の教形ふ見ゆるとのて飛驒の中ふ人の性
 なる谷なる人の教もくもりあやまそ谷法志がけりもは
 色たるのできけ道とて每り別びる人ふふおるくもつた
 人も書くふいもまててあやまらふ事なりとてふかの
 さいんくかききさのひおくみゆるうへは述べ書こまらる

母屋の崩落

母屋の崩落といふは家い無屋別所眞盛が生まるる家本ありて我に
 時より今ふ代の家お續して無屋と名景家挿るれが
 百姓より浮沈盛衰ちる極百年の家と保てる者多く余も書
 記すし法せい時彼家況を見て眞盛が舊物を見つる
 さいんくかききさのひおくみゆるうへは述べ書こまらる

あつちとつちの是れははたけけり物たりき事怪の事とら幸
徳園子の創祀とありし小寺中不成人にたり船その海を
しふ東海及びの沖津の沖とある舟ふ一むらの風を度々より
波船とてそあり船に大驚きそ是ら船のひきあをきとん
かきとふあり者ふ船切と焼べしとそ船中れ人のさす
頭切髪切あり大船一息氣空ふりけりし久被運
まもらまらふあふまきまきと救きしとそ是も亦然しと
半し庫志のすいそて足まは執獲の登りふ必雷の事す
ゆ成持るし其の伏ともあは雷あると足由日本とて
龍と雷のおおむとるものとあらず余を以阿常院の正キテ
イルと燃りてまじりしりのえは萬碗小入きし事碗ふ水は合色
と車以まりし事東院のふ指成近付しむまは自然の道
登る舞ひさうと意なる物なるまは登り事ありま氣の
よふお意なる事小恙の中とどるかのどく況マ天地の大
ありし事ありし事小恙なるは登龍のどく事とありと
ハ云へかしくと

黄鐘調

撞鐘と若鐘の調ふ小持るゆくとど兼好の徒然草も
大坂の天王寺の六時堂の鐘ハを鐘乃調りくゆとて
余と天とるよゆなきゆ鐘の撞の耐ふあぐてまら守又

入あふ必字一と心ひふ言事何の為よとて獄中登
 可しく夜よ入る世事おゆるりりるバお紙さく入後の
 ちとまらざるお念ひのまきりしうくけりくらふお紙さ
 定紙穿てゆるお紙後の神おせんきあるる一様と精て後の
 ちり定紙穿て穴の大小小なりて調子も他すべし若様小
 合さるふまきと穴て廣免若様の定中く穴とやむひ合
 く様と若様小様んと欲を精十通様あるとささる年小
 ちら年ハ雅るべし彼西園寺の様紙幾なり様とられしと
 初も全く様んとやのしんきと一話ら穴紙穿たんとさ
 ありしと調子一はもば古紙様として穴あるハ若必若様の
 調子るる一尾上カ田山の池け若文の様さく古人の紙用ひ
 一様とんえらるるささる傍後律の半石あるもあつら
 ては知るゆととて世に又様ハ若様小様といふのたさ知と
 してみざるお紙さゆお紙りし小様小穴ある奇妙くゆと
 ちらぬ何の為ふとといふ紙さるる人もあつらるるや
 おとてしんきと日本中ハ若様の神小けつらとて尾上
 様紙、ちとまらざる又穴ある様と外もさるるも一命と尾上
 様紙とるしんきと穴あるとていぬくさひ一命と尾上
 カ田山の様紙ゆとて神おせんきと若様の様紙さ今
 ちら若様揚る人定紙之穿たハ若様の神子也せんり

又或人の揚州長柄村為滿寺の鐘あり
 鐘ありといひ是れ鐘を以て言れども此の鐘は
 や又一とせある神道志の神前の鐘は双調乃おなりといふ法方
 亦これとて調子小針を境ありといふ余はかき人新小鐘と
 辨く不數十度辨はしきまはひは双調の音中五叶に
 うばむといふく双調小を以て鐘成度減らして双調小合と
 ころ是れ又極鐘小定成穿てりといふおはしり一余未詳と
 一はくといひくさるる音もさるる鐘を以て
 古鐘不ありは法事といひ南長柄の鐘と云く唐古南北
 朝の北燕の物といふ律真の音鐘ありと感心一又
 以黄鐘調の鐘成揚こりく數十なる小のひては法とて
 強も定も考らざる事成知もりといふく一は別小音
 律の去小ありたりなきは此記る畧なり

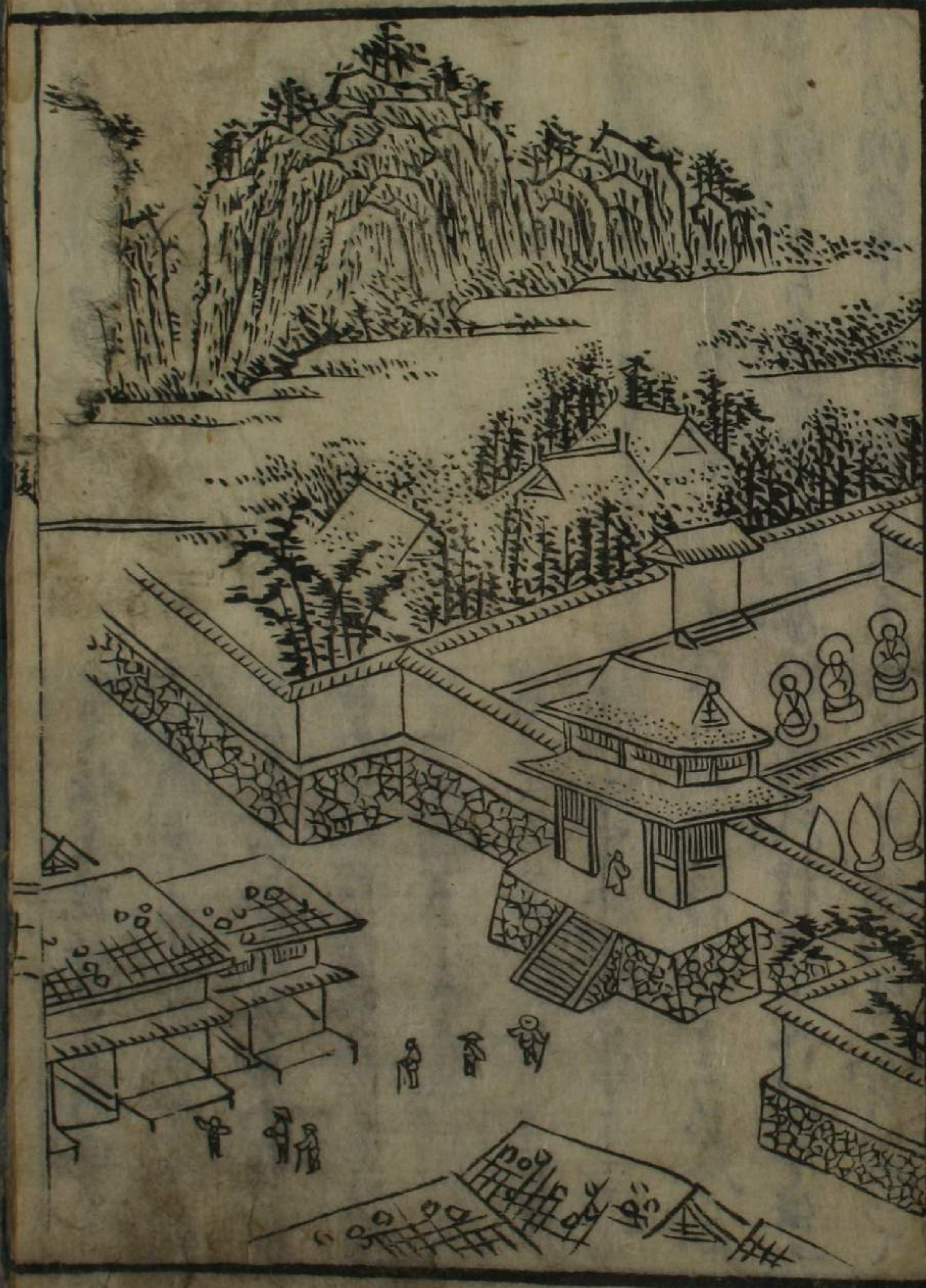
鐘本

坂上是則の和宗小鐘も亦や鐘もを小もあるといふく
 少くもかんえくありぬ者なりといふ一鐘本といふ本は
 昔も亦く不ありなりやかんえがくも無きといふく源氏
 語振も亦本の昔小一鐘の鐘とては亦式といふ鐘は
 一々其事録り奇怪なるも一々といふく一々といふく
 一々の居り信州も亦一々といふく一々のありてのんく東遊

次東曾街道の隈小妻子と云あり其妻子の隈よりある
街道と雖も同道小入る是れ飯田の城と出る街道也
其百十里津山遊谷計る其者の所より細乃之蘭原水
杯より所成るく其谷といふ所ありは其谷といふ所
くは其谷と云ふ所あり本者時と云ふ其谷の時より
ける一王平勝負平杯よりわがの平坦の所あり相い
谷の所より其の方より流く大なる谷なり感小谷川の音
やゆ其谷成おれく一向小雑樹はありまひ成るたる
にあり其山乃七八分目ともなる程は其の木のありたる
そ本秀てらんぬと云ふ其の木の又傍くたの方小木の
た小茂りたる本にせきくハ菜園山ある其木の志事と
るも似たり其木の木と其木の木と其木の木と其木の
格ふふ考ぐくまざらんぬ是即むりうら名もま
ま其木の木のまがく其木の木の其木の木の其木の
ゆらん其木の木のまがく其木の木の其木の木の其木の
るまぐ小在りとも其木の木の其木の木の其木の木の
くも遠まぬともいひあるがうあて其木の木の其木の
お後の木の木のまがく其木の木の其木の木の其木の
よりハ廿丁斗とも隔たり其の百姓の所の信くハ天照
を神の所より其木の木の其木の木の其木の木の其木の

親者より人の死をうしむる事びまじき事毎夜物交り通
ねんまう余もまうと通夜を小僧の度まで堂におもむる
るがまじき物あらず燈の光をともし人親をささふ
いたてん念佛の音を幽小僧の心付持まり初の日く人の
くまじきまじき神夜ととも四時をもち夜まじきもの
中らうとめし夜ふく余もあう數十百人小僧は死者の事
あうと云物世刻をあらわし毎夜必多の用帳あう寺僧達の
くらゐの帳しつ戸帳と開く帳としてまじき用帳と夜は文ぬ
物火の親かかのごう一人多の堂は度々一室寂しきこと
る程しけ時信心のくまじき流るるが余も法方の心院お
も親詣せりけし雨小掃る事毎夜かくのどく流るの
氣流とらるといふ事とまじき事ともし果用帳の時刻より
あつと堂は満員の氣流ありと云又戒壇先づりといふ事
ありとくお寺の西方の下と先と云云戒壇の中小僧の
圍中しおむるものく先と云々の傍案也して先と云々の傍
三遍廻りくお寺の西方念佛と唱あうけ戒壇めぐりの時
信の無き者もまじきの愛もあうといひ侍りけ寺の
西の方門前の町家と云々縁亭振大なる家ありしてまじ
るり町なり

と云々のものくあう河川流摩河としてまじき大河ニあり



藤維則寫
圖

けこの川の石と川中流と云む。伝言謙伝の古義傳あり
教あり。一雨ハ情系しく云む。筋のわづね又けを色味
推しある更科あり。婿捨ハ傳さくこの部之分目小堂の
里堂のをさる。事する横十四ある斗の大なるあり。を
りこく。又ある是婿捨の古伝。こころ又け色より赤小れ方
六里のをさる。小戸源ハ知かる。けをさる。てのさる。余ハ源ハ
ハ花り。とある。あり。のく。小戸源の守中。小洞宛あり。小洞宛
の中より昔より。土地住り。是汝九頭就。控現と云。只今小
あり。住ち。う。戸源の社僧。毎九頭就。控現ハ。涉。括と。傳
件の洞の中へ。入。色。を。海。系。的。船。ハ。結。就。皆。食。い。所。て
あ。う。と。け。控。現。の。事。蹟。い。ら。う。と。い。は。る。と。云。葉。小。け。く。一。巻。一
と。云。海。小。奇。異。の。事。あり

禊瀧湖

伝言源房の湖。之周囲。二里の小湖。けり。控現。ハ。礼。山。を。與
の中。小。あり。と。景色。ハ。を。双。の。地。け。け。湖。を。さ。り。け。と。富。士
の。少。面。と。さ。る。富。士。の。峭。壁。あり。て。富。永。ハ。伝。ハ。ん。で。富。士。の
形。を。け。け。と。り。ん。ら。も。又。奇。あり。や。と。相。け。け。小。若。格。よ。い。て
不。思。議。ら。ふ。の。あり。と。申。小。と。結。又。奇。妙。の。ゆ。り。す。け。け。水
を。小。を。さ。る。海。の。智。ひ。と。一。面。の。水。と。なる。厚。さ。數。尺。小
及び。全。湖。の。じ。と。あり。て。平地。小。異。なり。け。お。月。の。明。年

の二百近を人馬皆氷のよと従事してかゝりたる事あり
下の後防上の後防なる重の重なる氷を氷のよと云ふ事
ゆゑに後防一里ありて便利なる是なりまはるる事あり
はるる事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
ハ不思議なるや向ひて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
アまゝと云ふ事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
まゝと云ふ事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
なる事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
まゝと云ふ事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
引取りたる事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり

神あり候事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
はるる事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
属する事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
の氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
あの中にも温泉ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
温泉の湧く事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
月々又下の後防の拜殿の柱壁なりて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
の氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
せしめありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり
ふと云ふ事ありて氷のよと云ふ事ありて氷のよと云ふ事あり

とぞどり一少なき夜披はすありらも食非人小興てをさも
 別小行少くしあり一とる証志ある人びとて皆只海城の如
 尚との一呼身きるいれある彼錢鐘の時露草の町く一か
 在りともある家なほづつうりてのまおそ我慈恵て
 一ありとく頻り小教化一晝夜にけらるるてといふ事ある
 毎日々錢乞と好むも小兼くは和尚と信作の人進か常
 一と世佐をり始終錢乞小と之施乞一その以けりりたる小
 凡米百十依金六十兩といふ和尚の力て施一ありけ和尚常
 くハ小お成乞事びく一信眼ののりけりてのゆりの行とて
 次法儀聖園の傍あるは法人とるに信作帰信して皆く
 毎々の為錢と傳附して錢乞以救りせらるい二事露草よりは
 思ふ川舟の乗合由て露草の人の一とる信一と梅長一と
 以が美立の事よて書付ゆきり海小露草は莊内と村一
 て米穀は心のまよして元来大富國之富りり故お人の心
 温和めてかゝる仁慈のゆとありりさりとてさへ

